

余りモノ

異世界の

自由生活

10

【著】藤森フクロウ

Fuzimori Fukurou

【イラスト】木々ゆうき

勇者
じゃないので
勝手にやらせて
もらいます

マイルズ

学園に通う新興男爵家の令息。ティンパイン王国の神子ではないかと噂されている。

エリシア

辺境伯家の令嬢で、キーファン校舎からの交換留学生。ダイエットに成功し、今は乗馬に夢中。

ビャクヤ

カミーユと同郷の友人の狐獣人。策略家なところもあるが、身内には面倒見が良い。シンの護衛騎士の一人。

ラミィ

学園に通う平民の少女。マイルズとともにティンパイン王国の神子ではないかと噂されている。

シン(相良真一)

元ブラック企業戦士の異世界転移者。絶大な加護の力からティンパイン王国の神子になる。

レニ

神子であるシンの護衛として同じ学校に通う少女。魔法の才能に長けている。

カミーユ

ティラン王国の侯爵子息。見た目に反してポンコツ。やけに古風な言葉遣いをする。シンの護衛騎士の一人。

Main Character

主な登場人物

プロローグ

日本人の相良真一^{さがらしんいち}は、異世界転移をした。

転移前はくたびれたアラサーだったが、転移後は十歳くらいの少年になっていた。幸い、年齢以外はそのままだ。黒髪に黒い瞳をした平凡顔となっている。地味に困るのが、異世界基準だと細身童顔なので幼く見られやすいことだ。

若返りは、主神の幼女女神に与えられたスキルとは別の異世界転移特典のオマケらしい。

現在はシンと名乗り、スローライフ&スクールライフを送っている。

そして今はティンパイン王国の国立学園に通っている。

ティンパイン国立学園は王都に大きな敷地を持つだけあり、名門校の代表格だ。王都エルビアのほかに商業都市ズロスト、キーファンに校舎がある。その中で王都に構えるエルビア校舎は特に人氣があり、競争率が高い。

地道な努力が実を結び、シンはエルビア校舎に入学を果たしている。

シンは学園生活の合間に冒険者としても活動しているので、お金には困っていない。多くの神々

からの加護があると発覚してからはティンパイン公式神子^{みこ}となったので、やろうと思えば豪邸にも住める。

しかし、心が小市民であるシンに豪邸は馴染^{なじ}まないの、寮生活だ。少々手狭だが、こぢんまりした空間の方が落ち着く。

後见人であるドーベルマン伯爵夫婦から、屋敷の一部屋に住んではどうかと提案されたことがある。彼らは王都エルビアに邸宅を持っているので、そこから通学できるからと勧められたが、小市民の心に優しくない。彼らは優しい人たちなのだが、あの裕福な生活に慣れたらタニキ村のスローライフに戻れない気がする。

実家ポジシヨンのタニキ村は、風光明媚^{ふうこうめいび}な山村だ。自給自足がメインで、田畑を耕し山で狩りをして生計を立てる。

ド田舎^{いなか}なので、不便を楽しむのが醍醐^{だいご}味である。シンは魔法が使えるのでだいぶ楽もできるが、基本は自力で生活していた。

そんな地味ライフを好むシンであるが、現在とある壁^{そび}が聳^{そび}え立っていた。

（米が食べたい……）

もちもちなお米が食べたい。おにぎりにできる、粘り気があるタイプのジャポニカ米を欲していた。

白米は日本人のソウルフードである。

今まででましまし生活していたが、ついに限界が近づいている。

ここにもお米はあるが、インディカ米に近い。ピラフやチャーハン向きの、パラパラタイプなのだ。それはそれで相性のいい料理はあるのだが、シンの求める和食には合わない。

学食で出てくるカレーは、日本式のとろみのあるまろやかタイプだったが、米はインディカ系だった。ノットジャポニカである。

こちらの主食は小麦を用いた、パンや麺が多い。次点で芋、豆類となる。米の存在感は薄い。

マイノリティである米の品種は、当然ながら少ない。むしろ米は米。オンリーワンだ。

この世界には異世界転生者や転移者が多い。それも、日本から来た者が多いので、いくつかの調味料や料理が定着していた。

ちなみに、異世界人の召喚目的が軍事活用だったので、異世界人のスキルも戦闘系スキルが多かった。生産系のスキルは優遇されず、細々とやっていくことができる方。最悪、勝手に召喚してきたティラン王国の都合で抹殺される——というのが、先輩異世界人である、聖女カリンからの情報だ。

シンやカリンのように、上手^{うま}く別の国に逃げられたのなら運がいい。

異世界人を使い潰す気満々だったティラン王国は、今や神罰で虫の息。先の冬の豪雪で、国中が白く覆われたと聞く。

ティランに使い潰された中には、シンと同時に異世界転移をした日本人もいるだろう。トラック

転生ならぬバス転移を果たしたが、同郷以外接点がない彼らに会いたいとは思わない。

朱に交われれば赤くなるというし、ティランで生活するうちにモラルが欠如し、下衆な品性になっているかもしれない。

(ティランか……)

シンが思い出すのは、天狼祭でティンパインに乗り込んできたティランの王妃エマ。

国はもう機能していないので、元王妃だろうか。それは置いておくとして、彼女も元は日本人だった可能性が高い。

幼女主神フォルミアルカの口ぶりから、あれの中身が異世界人なのは確定だ。エマと同じような人間なんて、頼まれても会いたくない。金を積まれてもごめんこうむる。

エマは酷かった。持っているスキルも凶悪だったし、性格も悪い意味で突き抜けていた。

日本の物は恋しいが、日本人には会いたくない。絶妙なジレンマがシンの中に生まれていた。

例外のカリンは一般的な良識や善性を維持したまま、聖女としてこの世界に馴染んでいるので大丈夫だ。他の異世界人は、変に強いスキルや称号を得たせいではっちゃけている可能性が高い。

手堅く生きたいシンは、リスクを取ってまでして会いたくない。

(うどんは何とか作れたけど、あれはメインの材料が小麦粉だからな)

懐かしい味だし、落ち着く。でも何か違う。満たされない。

切望するのは白米。その境界線はくつきりはつきりしていた。

タニキ村ではカツオブシを作る用途が立つたので、出汁系の調味料やそれらを使った料理はできるだろう。だが、稲作についてはノータッチだ。

無理だと思うと、余計食べたくなるのが人の性である。

ティランの異世界召喚乱発の影響で、こちらの世界にも日本文化がちらほら継承されている。異世界人を探すより、そちらから攻めた方がいいかもしれない。

同級生のビャクヤ・ナインティルなんて、名前が日本語だ。カツオブシの件もそうだが、人間より獣人の方が詳しいかもしれない。

早速、ビャクヤに米について聞いてみた。

「うーん、稲作はやっとったけど、俺の田舎もこっちと似たような米やったで？」

ビャクヤは狐耳とふさふさの尻尾が印象的な狐獣人だ。後頭部で丸く結った、毛先に赤みを帯びた金髪、鮮やかな赤い瞳。どこかとらえどころのない耽美さのある美少年である。

見てくれは神秘的だが、中身はがめつく図太い。彼は関西系の訛りを思わせる、色々入り混じった独特の言葉を使う。

ビャクヤの祖国はティランだ。ビャクヤの祖先は異世界人と縁があったので、名前や文化に多く影響が残っている。

そんな彼なら、シンの求める米を知っているかもと期待していたが、ハズレのようである。

「え、ビャクヤのところもパラパラ系なの？ お稲荷さんに入れづらくない？」

「だからきっちり包むか、モチ……粘り気の強いのを潰したのをお揚げに入れて、巾着きんちやくにするかな」

「モチ米はあるのかよ」

「あるで」

それはそれで食べたいが、肝心の種たね籾もみを持っていないそうだ。

勉強のための移住という建前で、ティンパインに来たジャクヤ。稲作をするつもりは当然ないので、持っていないでも仕方がない。

「米については親父に聞いてみるわ」

ジャクヤの実家であるナインテイル家ならあるかもしれない。ティランからティンパインに移住しており、現在はタニキ村に住んでいる。そちらに手紙を送ることになった。

「タニキ村に行ったんだ」

「親父はジャクレンっちゅーオッサンや。手紙だと、ガキンチョどもに尻尾を掴つかまれ追い回されとるらしい」

「あー」

何とも言えない声になるシンである。ジャクヤも散々やられていた。

タニキ村は小さな集落なので、子供も限られている。シンが思い浮かべたのは、隣家のカロルとシベル、領主のところのジャックあたりだ。

揃そろいも揃そろって元気で物おじしない性格だし、ジャクヤへの態度からして獣人への恐怖心はなさそうだ。

「一番ええ尻尾やからって追い回されとるから、まんざらでもないんやない？」

他人事ひとごとのジャクヤである。自分がターゲットにされないならいいらしい。

第一章 故郷の味を求めて

お米が食べたい。

その一心で、シンは聞き込み調査を開始した。

シンが加入している部活は錬金術部。錬金術と名はついてはいるが、調査はしない。もっぱら料理ばかりなので、料理部や調理部と名乗った方が正しい気がする。

なので多種多様な立場の人間がおり、食への飽くなき探究心を持つ変人が揃っている。

部員は全学年、全学科を網羅し、平民から貴族まで身分も全てカバーしているので聞き込みにちょうど良い。

そこでシンは、まずは一番情報を持っていそうな人物に声をかけることにした。

その先輩の名は、ジーニー・マラムユート。

頭頂部でくるりと揺れるアホ毛、前髪ばつぶん、メガネっ子。属性多めの平凡な女子生徒だが、れつきとした公爵令嬢であり、次期当主というハイスペックな肩書を持っている。噂によれば、輝くような美貌の婚約者がいるそうだ。

彼女はチャレンジ精神旺盛で、どんなゲテモノだろうが一度は食べてみる気概の持ち主だ。たまに当たりどころが悪くて、失神している。

ジーニーは愉快的先輩筆頭だが、情報通だ。

「お米え？ あんまり人気じゃないからな。小麦なら結構品種があるけど、米は二種類くらいしかないよ。一つが学食でも出てるあれね。もう一つは飼料用だよ。量は採れるけど、美味しくないから人間向きじゃないかな」

一番期待していた情報源への希望が、あっさり断られた。

「食用のもイマイチかな。濃い味のソースやおかずと組み合わせることが多いから、米自体はあんまり美味しくないんだよね。米の味を誤魔化している感じ？」

ジーニー曰く、米の認知度も人気も微妙らしい。

どうやらティンパインでは米は麦の劣化穀物のようなポジションにあり、不人気なようだ。需要が低く、大半が飼料として扱われている。

錬金術部は食に貪欲な面々が揃っているの、米が人間の食料だと認知されていた。なので、シンは麦よりマイナーでも主食の一つだと思っていた。完全に盲点である。

（盲点！ そうだ……この部員たちは、いつも食欲に忠実な連中ばかりだった）

シンは今更になって思い出した。

部活で普通に食べていた米料理——チャーハンやオムライス、カレーライスは一般的には珍しい

メニューということだ。歴代の卒業生が米料理のレシピを残していたので、後輩たちにも米Ⅱ食料と刷り込み済みだったのだ。

卒業生の中には食料調達のために個人輸入や留学をし、食に関する進学や就職をする猛者もいる。「ちなみに錬金術部の卒業生の中には、学園の食堂で働いているシェフもいるよ。ほら、学食にもカレーとかがメニューにあったじゃん？」

学園は多くの階級の者が集うので、様々なメニューを布教する目的で就職したそうだ。あわよくば、珍味を輸入するルートを開拓しようとしており、潔いほど己の欲望に従順だ。

一応流通している飼料米を貰ってみたが、控えめに評しても二口目はご遠慮したい味だった。煮ても焼いても炊いても無理である。

諦めきれず、部活の時間で色々試行錯誤してみたがやはり水分量や炊き方を変えた程度では、米の性質はカバーできない。

(はあ……美味しいお米が食べたい)

ない物ねだりなんてしても仕方がないが、舌が故郷の味を求めている。



学園内の旧温室。

新しい温室は生徒たちの散歩やデーツスポットになっているが、こちらは忘れ去られたポロ温室だ。見てくれはあまり良くないが、機能はしている。

ここはシンが借りており、我が城のごとく、好きに植物を栽培している。大体は普通の野菜だが、たまに液体肥料代わりのポーシヨンの影響で奇妙な進化を遂げてしまうことがある。

以前、白マンドレイクの栽培に成功した——というより、土壌が合っていたのか異様に繁殖してしまったことがある。白マンドレイクは高級な魔法植物で、稀少価値が高い。

マンドレイク事件をきっかけに、シンは一部の教員から目をかけられている。だから多少のことでは追いつけないだろう。

雑草を抜きながら、シンの心は暗澹あんたんとしていた。

試験の結果が良くても、その心は晴れない。梅雨つゆの空のようにどんよりとしている。

隣にいる金髪ショートボブの美少女が、そんなシンを気がかりな様子で見ている。彼女はレニ・ハチワレ。シンの護衛を務める聖騎士であり、友人だ。

彼女はシンのことを心配していたが、理由は米だとはつきりしていても打つ手なしのドン詰まりなのも知っていた。

シンはそれとなくドーベルマン伯爵夫人のミリアに相談してみたが、彼女の情報をもつても、シンの欲しがる米は見つからない。

今から品種改良するにしたって、かなり時間と労力が必要となるだろう。シンが借りているのは

学園の施設だし、タニキ村で稲作するのは難しい。長期休暇にはタニキ村に戻るが、一年の大半は学園にいる。

米作りは時間がかかる。土作りを抜きにしても、春先から秋までかかる。シンの本分は学業なので、農作業に専念するのは難しい。

(ポーション栽培で……いや、そもそもド素人が品種改良とか無理だろう)

初めの時点で食味を見破るなんてできない。幼女主神から受け取ったスマホだって、そこまで鑑定できるほど万能ではなかった。

シンがどんよりしていると、黒いジャケットと白いズボンの乗馬服姿の少女が温室に入ってきた。彼女はストレートロングの青い髪をなびかせ、颯爽とやってくる。青い目を澁刺と輝かせ、ずっとシンに近づいていく。

少女らしい可愛らしさがあるが凛とした気品もあるこの少女は、エリシア・フォン・マルチーズ。シンと同じ学年で、マルチーズ辺境伯令嬢なので貴族科に通っている。現在は乗馬に熱中しており、そのきっかけとなったシンの愛馬のピコに夢中だ。

「あら、どうしたのかしら？ 随分元気がないじゃない」

「美味しいお米が食べたいのに、僕の好みの米がない」

珍しく萎れて^{しお}いるシンに、エリシアは怪訝^{けげん}な顔をする。

「……米って飼料よね？ あれ、一部では食べられているけど美味しいの？」

「美味しいもあるよ。でも、学食で出ているのとは違うんだよな」

「米なんて、パンにしても膨らまないし、煮るとべちゃつとなるし美味しくないじゃない。うちみたいな湿地で育つのはありがたいけれど」

エリシアはシンの言葉を聞きつつも、半信半疑だ。彼女もまた、ティンパインの一般的な考えを持っているのだろう。

米＝飼料なのだ。美味しくない認定をしている。

ちなみに小麦は湿地には向かない植物である。逆に米は水がたつぷりないと栽培が難しい。

「エリシアの実家、米を作っているの？」

「飼料としてね。うちはあまり小麦が作れないから……そうそう。それで相談したいことがあったのよ。うちで作っている飼料を、ピコやグラスゴーにあげていいかしら？」

エリシアはそう言って、麻袋を掲げる。その中に入っているようだ。

「そりゃ構わないけど」

シンの愛馬たちはデュラハンギャロップのグラスゴーと、ジュエルホーンのピコ。二頭とも魔馬なので、普通の馬と違って魔力を持っているし、強靱^{きようじん}な肉体をしている。

馬は草食だが、グラスゴーとピコは草食寄りの雑食。それでもって、胃腸も丈夫で割と何でも食べる。特に好きなのは、魔力を含んだもの。シンの作るポーションや、魔石なんかも喜んで食べる。さっそく飼料米を与えに行こうとするエリシア。

その後ろ姿を見て、シンは興味を覚える。エリシアのところで作っている飼料米はどんな感じなんだろうか。

このタイミングでエリシアに袋の中身を見せてほしいと言ったら、ドン引きされる気がする。どうにか、普通の流れで見られないだろうか？シンは考えた。

「僕も見に行つていい？」

「いいわよ。貴方^{あなた}の馬じゃない」

何故聞くのかと、怪訝な顔をするエリシア。

愛馬たちより飼料米に興味があるからなのだが、シンは曖昧^{あいまい}に笑って誤魔化した。

「シン君。せっかくだから間引きした人参^{にんじん}もあげませんか？」

レニが小さな人参を見せると、シンも頷く^{うなずく}。

「そうだね。捨てるのももったいないし」

小さな人参は人間でも生で食べられる。だが、グラスゴーたちの方が喜んで食べてくれそうだ。

人参は種から育てているので、そのまま育てると敵^{うね}に入りきらないほど大量にできてしまうのだ。全部育てるわけではなく、いい苗は残し、育成不良の若い苗は抜いてしまう。

馬たちはおやつが貰えて嬉しい^{うれ}い。シンたちは作物が無駄にならず嬉しい。いいことづくめである。

シンはエリシアとレニを連れて、傍目^{はため}から見れば両手に花で厩舎^{きやうしゃ}へ向かった。

(そういえば、エリシアとどういう関係なのか聞いてくるやつが増えてきたよな)

入学した当初もそうだった。その時は、レニと付き合っているのかと聞かれていたが。

シンは強い加護を持つティンパイン公式神子。その肩書を隠し、学園に一般生徒として入学している。

対外的には平民だ。若いながらも優秀な人材だと、ドーベルマン伯爵家に目をかけられているから、学園に入学できたという形にしている。

なので、シンとレニはそれなりに仲がいいが恋愛感情は皆無。互いに男女の面倒ごとに巻き込まれがちなので、そういう方面が枯れ気味だ。

エリシアは偶然仲良くなった同級生である。彼女は婚約者探しの真ただ中だ。エリシアは結婚相手の条件に、貴族であることを挙げている。シンとは大きな価値観の違いがある。この時点でどうにもなる気がしない。

この世界の貴族の結婚観は、晩婚化している日本と大きく異なる。名家出身の優良物件ほど婚約が早く成立する。マルチーズは裕福でもない田舎の辺境伯家。しかも、少し前まで肥満体型だったエリシアは、かなり苦戦していた。

そして最近、結婚相手の条件に興味の乗馬(他の騎獣でも可)を容認してくれることも入れている。

そこまで変な要望ではないと思うが、なかなかいい相手がいなさそう。

近寄ってくるのは訳あり物件ばかりで、エリシアも難儀している。

そんなこんなと思考を巡らしているうちに、厩舎に着いた。

二頭の愛馬は、シンの姿を見つけると目を輝かせる。ついさっきまで、近くのグリフォンと「やるんかい、ワレエ」と睨み合いをしていたグラスゴーも、別馬のようにキューートな眼差しを向けてきた。

「相変わらず、グラスゴーはシンを見ると態度が露骨に変わるわね」

呆れ交じりの嘆息をしたエリシアは、飼葉用の器の中に勢い良く飼料米を入れた。豪快に入れたものだから、いくつか飛び散ってシンの足元に落ちる。

これは絶好のチャンスである。

シンはそうとそれに手を伸ばし、まだ糲に包まれたままの米を拾う。

米を二頭の前に置いたが、怪訝そうに鼻を近づけてなかなか食べない。その様子に気づいたエリシアが、困ったように呟いた。

「脱穀した方が良かったかしら？ でも、あれって結構重労働なのよね」

この世界の脱穀は機械化されていないから、かなり原始的だろう。

このままだと食べないのだからか？と様子を見ているエリシアに、レニも心配そうに近づいていく。

シンは二人の意識が愛馬たちに行っている隙に、糲を擦って中身を確認した。

丸い。

今までの米より、明らかに丸みを帯びている。ぶつくりと厚みもあり、シンの知っている米の形に近い。この米はもしやと、大きく期待が膨らむ。

そして、これと同じ米の大半が、今どうなっているかを思い出す。

「エリシア、ちよっとま——」

シンはすぐさま確認しようとした。

「あ、食べたー！」

「良かったですね！」

それより早く、二つの嬉しそうな声が響く。エリシアとレニだ。

シンは止めようとしたが、一歩遅かった。

グラスゴーとピコは匂いから、出されたものが食べ物と判断したのだろう。器に顔を突っ込んでしまった。もっしやもっしやと無慈悲に咀嚼が始まってしまう。

シンの顔が絶望に染まるが、エリシアとレニはそれに気づかず喜んでいた。いい食べっぷりを披露する二頭に、良かった良かったと声を弾ませている。

シンにとっては故郷の味（多分）だが、二人にとっては飼料だ。

誰も悪くない。悪意なんてどこにも存在しないけれど、起こるべくして起こった事態である。

しばらくしてレニとエリシアが振り返ると、謎に打ちひしがれているシンがいた。



◆
シンが復活したのは翌日だった。

昨日寮に帰る道中、露骨に落ち込んでいたのでレニとエリシアは何かと思っていたものの、聞けなかった。シンがこれだけ気落ちするのは珍しいのだ。

次の日は戻っていたので、レニも一安心だ。

だがその経緯を知らないカミューとビャクヤは、珍しくへこむシンに首を傾げる。二人は昨日は騎士科の実習があり、シンに会っていなかったのだ。

怪我もなく無事に実習から戻ってきたので、みんなでいつも通り温室で集まって駄弁^{だべ}っている。学園には食堂やそれに併設されたカフェテラス、空き教室などもあるが、一番気兼ねなく過ごせるのはやはり温室だ。

人気の場所は争奪戦が起きるし、空き教室も似たようなものである。温室なら、そういった煩わ^{わづら}しさもなく快適だ。

いつもなら和やかなランチタイムに、微妙な顔のシン。レニから事情を聞いたビャクヤは意外そうな顔をする。「そないシン君が落ちこんどったん？」

「かつてないほど」

ビヤクヤの言葉に、沈痛な面持ちで頷くレニ。

いつもならさっさと切り替えるのに、今回のシンはずっと引きずっていた。

「シン殿は基本ドライでござるが、食べ物には執着するのでござるな」

カミーユが意外そうに、顎に指をやりながら首肯する。

シンが三食きっちり食べるタイプだとは思っていたが、カミーユもそのタイプだ。食事は大事である。日常の幸せに直結している。

カミーユに同類扱いされて、シンは一瞬だけ嫌な顔をした。そこまで単純じゃないと言いたかったが、不味い食事は間違いなく生活の質を下げる。

「うちの故郷の国民性かなー」

視線を泳がせて誤魔化すしかなかった。

何せ『食べ物への恨みは怖い』や『一宿一飯の恩義』などの言葉がある。それらが頭に浮かんで、これはもうそういう日本人の性質であると思うことにした。シンだけの考え方ではない——はず。

「あら、今日は全員いるわね」

「あ、エリシア」

しゃべっていると、制服姿のエリシアがやってきた。その手には、昨日と同じ袋がある。それを見つけると、シンの視線は釘付けになった。

呆れ交じりに嘆息しながらも、その袋をシンに渡すエリシア。

「はい。昨日の飼料……じゃなくてお米よ。麦に似ているけれど、これでパンは作れないわよ？」

エリシアの眼差しは、本当に食べるのかと言いたげだ。

彼女にとって、米は人の食べ物ではないのである。

エリシアはそこまで声に出して言っていなかったけれど、シンは表情で読み取れた。

「米は炊くものだよ、エリシア」

使い古された感満載の麻袋は、素手で触るとチクチクするくらいごわついていた。だが、シンは宝物を賜ったかのように大事に抱えている。

そのあまりの熱度、エリシアは困惑している。エリシアにとってこれは農場の馬や鳥が食べるものであって、人の食べるものではない。よっぽど困窮していれば食べるものという認識だ。

そんなエリシアをよそに、シンは呟いた。

「まずは脱穀して、粳と米を分けなきゃ。いや、その前にちゃんと中身があるのとないのがあるから、分別するのが先か」

シンは風魔法によって粒の重さで分別した。中身がスカスカのは粳殻と一緒に飛ばしてしまう。その次の脱穀は古道具屋で売っていた、年季物の杵と臼を使用する。米の脱穀用に購入したわけではなく、保存食づくりや錬金術で使う機会があるかもと、かなり前に入手したのだ。

今のところ機会がなく、死蔵していたがようやくの出番である。

いそいそと動き出すシンに、皆はちよつと引きながら様子見をしている。だが、ふとシンの動きが止まった。

「米が潰れた！ 粳殻を取ろうとしただけなのに！」

力が強すぎて、中のお米まで磨り潰してしまったのだ。目的は粳殻を取り、米の粒と分離させること。間違っても、米を粉末にするためではない。

その後も、シンは何度かチャレンジしたが道具と米の相性が良くないのか、米粉もどきを生産するだけとなった。

「う、嘘だろ……こんなに難しいなんて」

どんな想定外の姿になる米たちに、シンは頭を抱える。

砕けた粳と米が混ざり合って、謎の粉末ができてしまった。分けるのはもう無理だし、食べられる気がしない。

「あの、シン君」

「……何、レニ？」

「食堂の方に聞いてみてはいかがでしょうか？ 粳摺りの道具を持っているかもしれないですし、仕入れ先のお店がやってくれているなら紹介してもらおうとか」

レニの提案に、一瞬止まったシン。すぐに顔を上げて目を輝かせた。

その場を手早く片付けると、残っている米を持ってどこかへ行く準備をし出す。

「ごめん、学食に人が残っているか確認してくる」

「温室の世話はこちでやっておくから、時間は気にせんでええでー」

そう言ってジャクヤは悟りを開いたような優しい笑みを浮かべるが、見送る皆も似たような顔である。駆け出すシンに、ひらひらと手を振る。

騎士科や運動部も真つ青な俊足で、あつという間に走って行った。

「シン殿があそこまで気にする米。さぞ美味しいんでござろうなあ」

「うーん。どうかしら？ うちでは人が食べないから飼料にしているのよ？」

思いを馳せるカミューに、米が美味しいという考えにまだ納得のいないエリシアが現実を叩きつける。

「でも、故郷の味と言っていましたし……見つかるといいですね」

シンは異世界転移者だが、表立っての経歴は故郷を失ってティンパインまで流れ着いたという形だ。完全に祖国や実家に帰れないというのは同じだが、トラブルを防ぐためにも異世界人なのは伏せられている。

異世界人は特殊なスキルや称号を持っていることが多く、それを悪用するために近づく人間もいるのだ。その割合は低くない。

ましてや、今のシンは数多の神の加護を得ている身。何かが起こっては、国を揺るがす事態にな

りかねない。

神子という存在は、王族に匹敵する価値がある。去年の冬、神の怒りが猛威を振るった影響もあり、その傾向は顕著だ。なので学園内でも、国の護衛が隠れてついている。シンを守るのは、レニだけではないのだ。

騎士科のカミューとビヤクヤも、現在見習い聖騎士として奮闘中だ。本来、リーダーであるアンジェリカは、シンの代わりに王宮にいる替え玉の神子人形を護衛している。レニは後輩を立派な護衛にするために、日々厳しく指導中だ。

ただ一人、そんな裏事情を知らないのはエリシア。

すっかりいつものメンバーとして馴染んでいるが、学年後期になってから知り合ったため、シンを平民のごく普通の生徒だと思っている。



シンが米を持って、学食の厨房に走る。

仕込み中なのか、ふんわりとブイヨンの香りが鼻腔をくすぐる。こんな匂いを吸い込んでいると、それだけでお腹が減ってきそうだ。

厨房に入ると、大きな鍋を掻き混ぜている小太りの中年男性がいた。

「あ、あの！　ここでは米の脱穀ってできますか!？」

「入るんじゃないねえ、クソガキ！　まだ仕込み中って……脱穀？　それならメインストリートから二本ずれた卸問屋おろしどんやでやってくれよ。でっけえ麦穂の看板があるから、分かるはずだ」

つまみ食いかと思いい瞬眉を跳ね上げた料理人だが、シンの質問に意外そうに声を変えた。唸うなるようだったのが、心底不思議そうな声色になっている。

「メインストリートから二本目」

「怪しい干物を出している婆さんの店がある道を抜ければすぐだ」

「ああ、あの……」

シンの記憶から、一度も入ったことないけれど覚えのある店構えが引っぱり出される。

店構えがとにかくインパクトがあるので、分かる人には分かる。繁盛店の多いメインストリートだが、ニースが不明な胡散臭い店うさんくさいはたまにあるのだ。

その店には蛙、蛇、蝙蝠、魚と色々と干からびた状態で吊るされている。パッと見ただけでは、人気店に見えない。だが、メインストリートは人気店がひしめく激戦区。あそこに店舗を構えるのは、何かとお高つく。ずっと同じ場所に出世し続けられるからには、それなりに売り上げているのだろう。

「忙しい店だからな。休校日とか時間に余裕がある日を狙って、午前中に訪ねた方がいいと思うぞ」

「分かりました。教えていただき、ありがとうございます」

今日は無理なのか。そう思うと、落胆してしまう。それを顔に出してもどうにもならないと分かってから、シンは何とか表情を作る。

料理人のアドバイスに、ぺこりと頭を下げてお礼を言うシン。結局、週末の休日までお米はお預けとなる。

シンはとぼとぼと温室に戻ってみんなに報告することにした。

「と、いうわけですぐには食べられないって」

「うちなら脱穀できる道具があるけど、領地まで遠いのよね。粃を取ると虫が湧きやすくなるし、距離や所要日数を考えると休みの日の方が早いわね」

がっかりしているシンを見て、エリシアなりに考えたらしい。

たまに物言いがきつくなることがある彼女だが、他者を思いやる心は持っている。

「うちの領地、本当に田舎なのよね。変な魔物が出るとか、災害が多いわけではないの。ただ、ほんつとーに何もなくて。悪いところじゃないけれど、政略結婚をするにしても旨味が薄いよ。そうそう良縁は転がってないわよね……」

目からハイライトを消して、エリシアはどんよりと落ち込み始める。婚約者探しは、まだまだ上手く行っていない。自分で言っていて悲しくなってきたのか、ため息まで漏れる。

以前の彼女は癩癩かんしゃくを起こすたびにお菓子を食べて気を紛らわせていたので、かなり太っていた。

シンが代わりに白マンドレイクを食べることを勧めたら、成長期であることも手伝ってすらりとしたスタイルになった。乗馬好きということもあって、背筋も伸びている。

美人で爵位も結構高いお嬢様だが、それでも彼女の婚約者探しは難航中である。

「エリシアちゃん、実家にいるのは無理なん？」

ジャクヤとしては不思議だ。貴族の家なのだから、女性一人くらい面倒見られるだろう。

よつぽど放蕩癖ほうとうへきや浪費癖わうひがなければ大丈夫なはずだ。

「うちには兄がいるし、そっちが家督を継ぐもの。行き遅れ小姑ここうがずーと居座っていたら、色々と台無しじゃない。周囲からも針の筵むしろだし、お父様が変な縁談をまとめてしまう前に、何とかしないと将来が危ないのよ」

何かを思い出したのか、エリシアは自分の身を抱いてぶるりと震えた。顔色も悪く、よほど嫌なことなのは察せられる。

金銭的な理由というより、世間体の問題なのだ。

「未婚の貴族令嬢に対しては体が弱いとかの事情がない限り、世間の目は厳しいでござるからな。外間もあるでござる。今の状況に胡坐あぐらをかいたままだと、とりあえず出てけとばかりに年の離れた老人の後妻にされるかもしれないでござる」

令嬢の婚活の闇である。カミーユの説明に、エリシアは無言でこくこくと頷いていた。

エリシアは見ての通り健康体だし、学園にも元気に通っている。部活動も積極的に行い、騎獣を乗りこなしている。虚弱体質で通すには無理があった。

ちなみに、この手の婚活は爵位を継承できない子息にも適用される。次男はスベアや手伝いとして残されることがあるが、三男以降は自分で食いつ持^{ぶち}を稼^{かせ}ぐ必要がある。

嫁を取るなり婿に入るなりするにしても、相応の努力が求められる。

マルチーズ家の方針は、エリシアをスベアにはせず他所^{よそ}へ嫁^{よめ}がせる前提で考えている。

「某^{それがし}も実家にいたら、どこに売り飛ばされていたのやら」

そう語るカミーユの諦観の眼差しに、シンは子牛が売られていく曲が聞こえた気がした。

「そういえば、カミーユはテイランのヒノモト侯爵家出身だそうね」

「今は縁を切り、母の旧姓のサナダを名乗っているでござる。十一男なんぞ、継ぐものはないでござるからな」

エリシアの言葉に、死んだ目をして答えるカミーユ。その荒^{すさ}んだ空気だけで、散々辛酸を舐^なめて過^あぎしてきたのが分かる。

テイランの状況を考えると、もはやヒノモト侯爵家の将来は絶望的だろう。国ごと爵位が取り潰されていそうだ。

「カミーユんとは、テイラン貴族の中でも選り抜きのクズやしなあ」

ビヤクヤがさらりとヒノモト侯爵家を貶^{けな}すが、カミーユは反論するどころか頷いていた。

シンとはそれなりに話をする仲ではあるが、カミーユは実家のいいところを語ったことがない。大抵、闇の深い不幸話だ。

「そういえば、テイランってかなりヤバイんだらう？ 実家も残っているの？」

シンの知ってる限り、テイランは国の存続も無理だろう。ヒノモト侯爵家は以前、カミーユを頼ってティンパインに亡命を希望していると聞いた記憶がある。

その割には横柄な態度で、カミーユに命令する文面だった。

カミーユは断っていたが、それから話に上がっただろうか。

「だいぶ前に手紙も途切れているでござるからなあ。二度と顔を見たくないでござる」

後半が本音だろう。心配しているというより、そのまま二度と自分の人生に関わってほしくない、出てこないでくれと思っていそうだ。

身内のはずのカミーユから百害あって一利なし判定を受けている。

いつになくブラックオーラを漂わせるカミーユに、ビヤクヤとレニは苦笑している。エリシアだけが状況を察しつつも、完全には呑み込めていない。咄^{どつ}嗟^さに、隣のシンを指で突く。

「ね、ねえ。カミーユの実家ってその」

「ろくでなしが多いらしいから、突っ込んでやるな。聞いた限りだと、カミーユの母親はまともだけど、親父や長男兄貴とかは最低最悪みたいだし」

シンが断言するので、エリシアは顔色を悪くさせながら頷いた。

「ござるしゃべりが独特な能天気な少年だと思っていたカミューが、意外と苦労性と知ったエリシアだった。」



待ちに待った休日。

今日の天気は良く、この日を待ち望んでいたシンの心を表しているようだ。雲の少ない青空に、風もほとんどない。実に外出日和だ。

（よし。今日は一日空けたから、米に時間を使えるぞ！）

シンは手早く寮室を出る準備をした。マジックバッグに米を入れて出発する。

レニたちが一緒にについていくと言ったけれど、その後でグラスゴーのストレス発散に遠乗りをすると言ったら黙ってしまった。

脅すつもりはなかったのだが、グラスゴーは車だとスポーツカーやレースカーの性能に、戦車の火力を足したような魔馬である。

最近遠乗りができていないため、嬉しさを爆発させてハッスルする可能性が高い。

寮を出て目的の店を目指す。厨房の人に教えてもらった通り、目立つ看板があったので目的地はすぐに分かった。脱穀機の音なのか、外まで重機のような轟音が響いている。扉を開けると、一段

と大きく鳴り響いていた。

年季の入った木製のカウンターがあるけれど、受付の人は不在だ。奥にある廊下では、店員らしき人たちが忙しく行き来している。

「七丁目の騎獣屋に卸す分は脱穀できた!？」

「できたけど……袋に穴が開いてこぼれた！ まだ時間がかかる!？」

「貴族街行きの飼料のブレンドは!？」

「馬が動かないー！ こんな重たいの、このボロ馬には無理だよ!？」

修羅場真っ最中だ。

聞こえてくるだけで、トラブル発生と確認の聲が飛び交う。店員は何人かいるようだが、忙しく走り回っていて人数までは分からない。

「やっぱり新しい騎獣を買った方がいいよ！ こいつだけじゃ回らねえ!？」

「なら騎獣屋行くついでに、良さげなの買ってこい！ とにかく運べ!？」

「大変！ 馬が動かない！ 重さじゃなくて怪我だ！ 蹄に釘が刺さってる!？」

店の奥からどよめきが広がり、次に怒号と悲鳴交じりの絶叫が響く。

盛況なのはいいことだが、この店舗規模に対して仕事量を詰めすぎではないだろうか、余計な心配をしたくなるほど忙しそうだ。

待っていても仕方がないと、シンがカウンターの呼び出しベルを鳴らすが気づいていない。絶叫

にかき消されている。原因である馬の怪我は致命的なアクシデントらしい。

来客に気づく様子がないので、シンは静かに腹をくくった。不本意だが、首を突っ込むことにしたのだ。

一度外に出て、店の横の道から奥に行く。多分、店の裏側に繋がっているはずだ。

従業員らしき作業着の男性が見える。後ろ姿だけで顔立ちや年齢は分らない。

「あのー」

「ん？ 新しいの雇ったか？」

小太りの中年男性が、シンの声に怪訝そうな顔を出し振り返る。

どこにでもいそうな朴訥とした顔立ちで、すぐに忘れてしまいそうな薄い印象である。

「客です。何かありましたか？」

店内の修羅場は見ていたけれど、すつとぼけて質問するシンである。

「客？ 珍しいなあ。大抵常連だから、すっかり店番を留守にしちまっていたな。悪い悪い。まあ、見ての通りだ。馬が怪我しちまってな。治るのを待ってられねえし、かといって神殿や医者では家畜や騎獣の治療は後回しにされるからなあ」

困ったもんだぜ、と肩をすくめるオッサンである。

シンが彼の隣にいる馬を見ると、後ろ脚の蹄が一つ割れて、そこからじわじわと血が出ている。体重をかけると痛いのか、その脚を浮かせていた。

かなり手入れを怠っているのか、普通の馬の蹄の二倍くらいの大きさがある。

その痛ましい姿に、自分も愛馬を持つシンは心配になる。

（輸送中に、落ちていた釘でも踏んだかな）

馬は骨折すると殺処分になれやすい。自然治癒が絶望的なのだ。

怪我の治りより、馬は脚を第二の心臓として血液ポンプにしている。歩けなくなることにより、身体に大きな支障をきたすのだ。

シンはさつと馬に近づき魔法を使う。蹄を水で洗い流し、治癒魔法をかける。泥はだいぶ落ちたけれど、削蹄されていらない不格好な蹄が目立つようになった。

無詠唱、そしてあまりに素早い処置だったので、オッサンはぼかんと口を開けていた。

「念のため、ポーシオンを飲ませて？」

「え？ ああ……でも、高いだろ」

「自作なんで、そんなに気にしないでいいですよ」

シンは興味本位と趣味でポーシオンを作っているが、怪我を治すより、グラスゴーたちの機嫌を直すためのおやつに使われることが多い。

蓋を外し、馬の口元にポーシオンを差し出す。馬はおずおずとこちらを見つつも、そつと瓶を啜（く）えて飲み干した。

（毛艶もいまいちだし、他の蹄もボロボロだよな）

初めて会った時のピコを思い出す。ピコもまた骨折しており、額の角は折れていた。毛並みも蹄もボロボロで、無事なところを探す方が難しい状態だった。

この馬もろくに労^{いたわ}られずに酷使されているのだろう。

少しでもコストを削減しようと、馬にかける費用をケチっているのかもしれない。

ボロ馬なんて呼ばれるのも納得してしまうくらいには、手入れがされていないのが分かる。

馬は自分に優しくしてくれたシンを、キラキラした目で見ている。ずっと痛くて辛い思いをしていたのがなくなり、嬉しいのだろう。

馬を見ていると嫌でも目に入る、馬が繋がれた荷台。その上にうずたかく積まれた、重そうな麻袋。

仕事が繁盛しているのはいいが、馬には酷な現状である。

「……これ、一頭の馬に運ばせる量じゃないですよ。ばんえいでもないのに」

こんな無茶をさせたら馬の体もボロボロになる訳だ。無茶をすれば疲労も大きいし、怪我のリスクも高まる。短期間で何度も馬を使い潰していたら、その方が無駄な出費になる気がする。

「だがなあ、馬を仕入れると出費がデカイんだ」

先ほど騎獣屋に行けという指示が聞こえたはずなのに、オッサンは行きたくなさそうにしている。騎獣屋に行くのが面倒なのか、馬を見る目に自信がないのかは分からない。

いずれにしろ、乗り気ではない。

「何度も買い直す方が、お金がかかりますよ。それにこの子が病気や怪我で動けなくなったら、フォローが大変ですよ」

オッサン店員もそれは分かっているのか、渋い顔をした。もしかしたら、過去に似たような経験があるのかもしれない。

店の繁忙ぶりを見る限り、稼ぎがないわけではなさそうだ。学園に商品を卸しているくらいだから、信用されている店で複数の太客がいるはずだ。

仕事に穴を開けてしまう方が危ない気がする。

「じゃあねえな。新しいの仕入れるか。こいつはもう動かないみたいだし」

オッサンの話によると、今日の馬は特に言うことを聞かない、荷物を運ぶのを嫌がっていたし、蹄や毛並みがボロボロなのは分かっていたが、宥^{なだ}めすかして働かせるにも限度があるとのことだ。

去年まで二、三頭で回していたが、一頭でも何とかできるのではと横着していたようだ。

こいつ、と馬を見上げたオッサンは一瞬止まる。

気のせいかな、馬が若返ったような気がする。目に精気が戻っているからだろうか。滅多^{めった}に貰えないポーションを子供から貰ったから、元氣に見えるだけかもしれない。

「僕は馬の手入れ道具を持っていますし、この馬の体とか蹄を綺麗^{きれい}にしてやっていいですか？」

「あ、ああ。そういや、坊主。ここに用があつて来たんだろ？」

馬に氣を取られていたところでシンに声をかけられ、一瞬驚くオッサン店員。シンは不思議そう

な顔をしたが、すぐに馬の方を見た。

「はい、糲摺りを頼みたいですよ。米は持ち込みですけど、大丈夫ですか？」

オッサンはこくりと頷く。さっきまで苛立っていた馬は、嘘のように上機嫌だ。ブラシを選んでいるシンに擦り寄って顔を擦り付け、アピールをしている。

シンは米の入った袋をオッサンに渡すと、すぐに馬の手入れにかかった。その辺にあつた使い古した椅子の上に、道具を置いて世話を始める。

どうせ、糲摺り中は待ち時間だ。馬の状態は気になったし、暇を潰せる。

「これくらいの量なら、道具が空く時間も考えると……まあ、一時間ちよいだな」

「分かりました。ここで待っています」

とりあえず、怪我をしていた脚から診ていこう。

怪我は治しても、長らく手入れを怠った蹄は酷いもの。泥と敷き藁が固まって張り付いているし、伸びきった蹄はひび入りの分厚いフリットの衣のような有様だ。一体どれくらい削蹄していないのだろうか。

これでは、いつまた怪我をするか分からない。

(忙しいとはいえ、この扱いはちよつとなあ……)

愛馬を二頭持つており、元騎獣屋アルバイターだったシン。馬の削蹄くらいなら余裕だ。

グラスゴーとピコはこまめに手入れをしているので、こんなに豪快に削ったことはない。騎獣屋

の騎獣だって、こんなになるまで放置されたのはいなかった。

形を整えた後は歩きやすくなったのか、馬も嬉しそうだ。

その後は飼葉を与えながら、ブラッシング開始だ。石のように固い毛玉と埃の塊は鉋やナイフで切り落とす。ここまでガチガチに固まっていると、ブラシが通らない。強引に梳かそうとすると、こつそりと毛が抜けてしまう。力尽くだと皮膚ごと千切れるので、切るか剃るかがいい。

魔法も使うが、細かいところは手作業が必須だ。

無心で馬の毛並みを整えていると、オッサン店員が戻ってきた。その手には、糲摺り済みらしき米が入った袋がある。

「……うちの馬か、そいつ」

「そーですよ。綺麗になったでしょう。大事にしてあげてくださいよ」

ボロ馬がサラブレッドのようにぴっぴかだ。

馬なので当然しゃべりはしないが『こんなに大事にされたのは初めてで嬉しいですよ』と、澁刺とした表情が語っている。

「……こいつ、こんなに若かったっけ？ 本当にさっきの馬か？」

オッサンが別馬並みに変わった馬を、しげしげと眺めながら呟く。

当たり前であるが、シンはすり替えなどしていない。

「そうです。酷使しすぎですよ。あと世話をさぼると病気や怪我のもとですから」

あの脚の怪我だって、放っておけば命に関わっていただろう。雑すぎる世話では、感染症などを起こしてしまう。

シンはグラスゴーたちを飼うようになってから、馬好きになったというか、^{ひいき}最親があるのは自分でも理解している。余計な忠告だと思いつつ、この馬がまた粗雑に扱われるのは避けたかった。

ふと、厩舎を見ると三頭分の広さはある。本来は複数で運搬していたのだし、上司らしき店員から買えとお達しがあつたのに渋る意味が分からない。

「馬は高いんだよ」

「馬に拘^{とく}らなくても、ロバでも牛でも荷は引けますよ」

運べる速度と量はその個体による。馬よりペースダウンするかもしれないが、馬より安価な荷物運び用の騎獣はいる。

シンとしてはお得意様への配達に穴を開ける方が、商売の上であつてはならないと思う。信用に関わる問題だ。

そもそも、馬の購入費も飼育費もオッサンのポケットマネーじゃなくてお店のお金のはずだ。

(でも、外野がこれ以上言うのは営業妨害かな)

糲摺りの終わった袋を見ると、玄米ではなく白い米が見えた。ぬかもないとなると、精米済みとということだろうか。

「精米までしてくれたんですか？」

「うちにわざわざ来たつてことは、食用だろう？ そーいうもんだろ？」

シンは喜びで顔を上げるが、オッサン店員はよく分かっているらしい。

人が食べる分は、それ用の道具の中にぶち込んで終わらしい。中がどうなっているかは、メンテナン^ス業者しか知らず、店員すらどうやってこの状態で出てくるか不明だそうだ。

とりあえず、すぐ食べられる状態に仕上げてもらったので良しとする。

シンは期待に胸を膨らませ、寮に戻る。あとは米を炊くだけだ。

そこでふと気づく。飯^{はん}盒、土鍋、圧力釜など、一般的に米を炊く道具がない。普通の鍋はあるが、それだと圧力が足りずちゃんと炊けないかもしれない。炊飯器なんて当然ない。

シンはスマホを取り出し、米の炊き方を検索する。普通の鍋でも炊けるようで、これならシンでもできそうだ。

ついに念願のお米が食べられるのだ。



寮に着くと、シンは寮母に焚火^{たきび}の許可を得た。裏庭の一部を使い、そこで調理するのである。厨房を使うなんて恐れ多い。何せタイミ^ングが悪い。今は夕食の準備中だ。

育ち盛りの男子生徒の胃を満たすために、寮の厨房は戦場と化している。もちろん使われていない時間帯もあるが、今日はシチューだったので大鍋が竈の上を占拠している状態だ。

変にごねるより、諦めてしまった方が楽だ。シンは冒険者なので、火おこしや煮炊きができる道具を一式持っている。

この世界に来た時は、ティラン王国の城の中だった。勝手に召喚しておいて、シンに望むスキルや称号がないからと僅かな金銭を持たされて追い出されたので、それからはもっぱら野宿が多かった。

幼女な主神フォルミアルカから貰ったスマホがあったので、何とか素人でもやれた。回数を重ねれば勝手も分かって慣れてくる。

その後、何とかティンパインに移動し、タニキ村に定住できたのは運が良かった。

それまでの間、日々の宿代も馬鹿にならないので節約のために野宿をした。駆け出し底辺冒険者のできる仕事なんて限られているし、いざという時に懐が心もとないのは不安である。

天気は必ずしもいいわけではない。風雨が吹き荒ぶこともあるし、季節による温度変化だってある。獲った魚や鳥を捌いて調理することだってあった。

「はじめちよろちよろ……って、これは鍋でも適用されるのか？」

適用されるようだが、やはり使う道具によって若干違う。シンは金属の鍋で炊くので、弱火でじっくりやるのがコツとあった。

美味しいご飯のためだ。多少の手間は惜しまない。

何度もスマホで手順を確認しながらお米を炊く。こんなに真剣に料理をしたのは初めてだ。

最初は弱火でじっくり、米の芯までしっかり炊けるように、火の強さに細心の注意を払う。湧き出る水蒸気の中に、徐々に懐かしい米の香りが混じり始める。蒸らす時間もしっかり。

待ち遠しい時間を経て、ようやく米が炊きあがる。

蓋を開けると、真っ白な炊きたてご飯が目見えた。艶々ふつくらしながらも、しっかり粒が立っている。

「おお！ これだよこれ！」

感動のあまり、大きな声が出る。

丸い米が揃っている。普段食べるやや細長い米とは明らかに違う。

そういえば、おかずを考えていなかった。生卵と醤油があれば卵かけごはんにしたところだが、こちらの衛生環境を考えると難しい。前の世界の卵にはサルモネラ菌が付いていることがあった。

スマホによれば異世界でも同じらしい。

この世界と前の世界には同じ名前の動植物が多くあるが、菌まで同じようにあるなんて。それはなくいいと思うシンであった。

仕方ないので卵かけごはんはやめる。人生、諦めも肝心だ。

以前肉屋で買ったハムを取り出す。主神フォルミアルカから貰ったスキルのおかげで、食材を劣

化させず保存できる。マジックバッグは持っているが、こちらはそこまで万能ではない。

ハムは贅^{ぜいたく}沢に厚切りに。ここは譲れない。ハムの厚さによって、噛^かみしめた時の幸福度が大きく変わるのだ。フライパンに少しかけ油を引いて、火にかける。じわじわと脂が染み出て、ぱちぱちと弾けだす。同時に香ばしい焼ける香りが漂ってきた。

（くううう！ これこれ！ 米とは違う食欲を刺激する匂い！）

いい感じに焼けてきたので、ハムをひっくり返す。

両面が焼ける間にご飯をお椀に盛る。時間帯など気にしない。思い切って、山盛り一杯だ。

ふと、ご飯に対してハムだけでは単調ではないかと気づく。油を軽く拭いたフライパンに、卵を落とした。ハムエッグにはせず、あえて別々だ。

まずは米を一口。

「~~~~~!!!」

このもっちりとした柔らかさと粘り気。間違はなく、シンの求めていた理想形。今まで食べてきた米の中で、シンの故郷の味に一番近い。

熱々の炊きたてご飯は口の中に極上の満足感を与えてくれた。しばらく一心不乱に掻き込んで、一杯目はぺろりと平らげてしまった。おかずの出番がなくなってしまう。

「これだよ！ これ！」

エリシアから貰った米は、シンの求めていたものだ。彼女の実家では飼料扱いなのが納得いかな

いが、どうやらあちらでは炊くという調理法をしていないようだ。

飼料扱いなら、小麦よりずっと安いはず。安価に大量に手に入れられるのはありがたい。

次はハムや目玉焼きと一緒に。ハムはしっかり味が付いているので、目玉焼きにだけ調味料をかける。醤油の代わりに魚^{ぎょ}醤^{しょう}を少々。

次の一杯もぺろりと平らげ、結局炊いたお米は空っぽだ。お鍋に張り付いていたおこげも、綺麗に一粒残らずこそぎ取った。

（い、生きてて良かったー！）

諦めないで良かった。やはり米こそ日本人のソウルフード。

パンも麺も美味しいけれど、やはり白米が一番いい。食の原点に位置する。だが、原点にして至高だ。

残ったらおにぎりにして保存しておくつもりだった。冷凍庫はないが、神様から貰ったスキルは文明の利器より便利である。

（よし、エリシアにこれを分けてもらえるように頼もう）

シンは冒険者としても稼いでいるが、それとは別に美容液のレシピでマージンを得ている。貴族や豪商などの富裕層に好評で、かなりの収入になっている。

初めてその入金金額を見た時、目玉がぼーんと飛び出るかと思った。金額が、文字通り桁^{けた}違い。普段見ているレベルとは比較にならないからである。

老後まで使うつもりはなかったが、この際金に糸目はつけられない。絶好のチャンスを逃すなんて、愚の骨頂である。



休日は米をしつかり堪能し、シンの学園生活がまた始まる。

特に約束がある訳でもないが、いつもの顔ぶれが朝昼夕と集まる温室。部活動がなければ、自然と顔を合わせることになるのだ。

「エリシア！ あのお米がもっと欲しいんだ！ 多ければ多いだけいい！ 輸送とか一切合切の経費も請求していいから、売ってくれないか？」

「え、シン。本気？ あんなもの、本当に食べるの？」

実はエリシアは米が苦手である。粃を剥いた後のビジュアルが虫の卵っぽくて嫌いなのである。特にマルチーズ領で採れる米は丸みがあるので、一層それっぽい。

騎獣をはじめとする動物は好きだが、虫は苦手なものが多い。

それを欲しがるシンの心が分からない。エリシアの中では、あれは家畜の食べるゲテモノだった。「うん、食べる。あれは僕の故郷の味に一番近いんだ」

どこまでも澄んだ瞳で言い切ったシンに、エリシアはどきりとする。

真面目な顔をして言っているが、シンはどこまでも食欲に取り憑かれていただけである。長らく再会できなかった米の味とついに邂逅を果たし、完全に我を忘れている。

「あんな不味いモノが……」

「不味くなーい！ ほら、おにぎり持ってきたんだ。エリシアの領地で採れた米だよ」

そう言って、シンが差し出したのは塩むすび。どんな具がいいか迷ったが、定番の梅干しは強い塩味と酸味で好き嫌いが分かれやすい。そもそも持っていない。おかか、昆布、鮭、ツナマヨなども同様だ。

結果、手元にあるもので好き嫌いに関係がない塩に落ち着いた。

だが、それが良くなかった。米Ⅱ虫の卵に似ているという先入観を持つエリシアには、塩むすびが卵の塊に見えてしまう。

米の良さを知ってほしいシンと、苦手なものにビジュアルがそっくりな食べ物（推定）を突き付けられたエリシア。

しかもおにぎりは米の塊。つまり、エリシアにとって虫の疑似集合体である。

その場の空気が、一瞬固まる。

「おお！ これが例の米料理でござるかー！ パツと見たところ米を固めただけのように見えるでござるな。某もいただいても？」

ひよつこりと顔を出したカミーユが、涎を垂らさんばかりに残りの塩むすびを見ている。

「二人一個ね」

シンは米を布教するため、いつもの面子分は昼食とは別に、塩むすびを五つ作っていた。自分の分も欲しかったので、ちゃっかり頭数に入れている。

「やったでござるー！　いったきまーす！」

シンからお許しを得たカミーユは、笑顔で塩むすびに手を伸ばし、躊躇いなくかぶりつく。

カミーユほど前のめりではなかったが、シンの故郷の味に興味があったレニとビャクヤも続いた。「おお！　もっちり？　むちっと？　柔らかさと弾力が違うでござるな！　ちよつと濃い目の塩味が米を引き立てているでござる！　噛んでいるとどんどん甘くなるでござるなー！」

若い十代の体は、いつだって栄養を求めている。カミーユはちよつと変わった穀物だろうが、食べ物なら気にしないガバガバな味覚をしていた。

部活やタニキ村でシンの料理を食べていたので、彼の味覚を信頼していたこともある。

信頼や信用なんて言えば聞こえはいいが、それは別名『餌付け』という。

「あ、本当ですね。普段食べている米とだいぶ違います。こちらの方が味や香りも強いような気がします」

「この米は存在感があるんやな。しかも粘りがあるから、形も作れるっちゅーわけや。こっちの方がお稲荷さんも作りやすそうやな」

レニとビャクヤも、頷きながら塩むすびを堪能する。

三人からはおおむね好評である。米の味が受け入れられ、シンは満足そうに自分も塩むすびを食べる。

一方、目の前で四人が一気に食べ始めたので、ますます拒否しにくくなったのはエリシアだ。食べなくてはと思っではいるけれど、エリシアの目には虫の卵の塊に見えてしまう。

（でも、シンがわざわざ用意してくれたのを無下になんて……もう！　しょーがない！）

外見が苦手なら、見なければいい。まぶたを強く閉じて、エリシアは塩むすびを口にした。

不思議な柔らかさ。ふんわりとは違う、粘りのある弾力。素朴な味が口に広がり、エリシアはようやくこれが食べ物だと認識できた。

「い、意外と美味しいじゃない」

実際に口にすれば、虫の卵じゃないと分かる。

柔らかくて、ほのかに甘い。これが米なのかと首を傾げてしまうエリシアである。

エリシアの知っている米は妙に臭くべちゃべちゃと口の中に張り付いて広がるうえ、芯が残る絶妙に硬くて不快な食感だった。

こんなに食べ物らしいものじゃなかったはずである。

だが、シンから貰ったおにぎりは囓むのも飲み込むのも苦痛じゃない。

（……これなら普通に食べられるわ）

ティンパイン王国の主食は小麦。エリシアの実家であるマルチーズ領もそうだ。